平成10年度厚生科学研究・子ども家庭総合研究事業
「小児糖尿病・生活習慣病の発症要因、治療、予防に関する研究」

診療所におけるインスリン依存性糖尿病の管理
（分担研究：小児インスリン依存型糖尿病の実態と治療法、
長期予後改善に関する研究）

研究協力者：五十嵐　裕

要旨：糖尿病などの小児内分泌疾患と風邪などの急性疾患の診療の両立をめざした診療所での、小児インスリン依存性糖尿病の管理は診療日や診療時間に余裕があるため、患者さんは学校や勤めの都合に比較的合わせやすく、より定期的受診が可能であると思われる。また診療時間も十分にとれるため、じっくり患者さんや家族との話し合いが出来、より現実的な対応が可能である。診療に必要な器具、人員も比較的容易に購入、増員が可能である。無床診療所であることや遠隔地の患者さんの管理も行っている事より、夜間の低血糖などには病・診連携は不可欠である。高い専門性を維持することにより、患者さんのライフ・スタイルに柔軟に対応できる診療所でのインスリン依存性糖尿病の管理は有効な方法の一つと思われる。

見出し語：インスリン依存性糖尿病、診療所、治療・管理

［研究目的］

インスリン依存性糖尿病の管理・治療は長期にわたり、定期的な受診も必要である。しかし、大学病院などの専門外来では受診日が決まっていたり、診療時間も限られていたりするために、患児や家族と主治医との十分な話し合いも出来にくい場合もあり、その結果として糖尿病に対する説明が不十分だったり、生活の変化などに対応仕切れない事も予測される。そこで、学校生活にも支障の少ない曜日や時間に受診出来るように設立した、小児内分泌、糖尿病を対象とした専門性を生かした診療所での糖尿病の管理状況を検討する。

［研究方法］

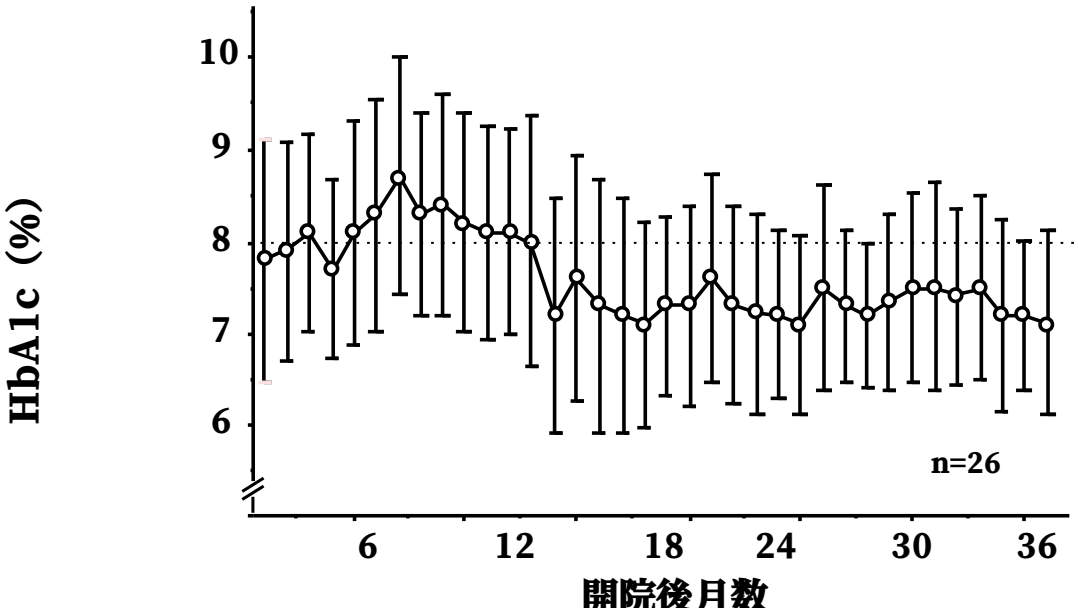
診療所の占有面積は 60 坪である。敷地内の駐車スペースが共同使用ではあるが７０台分有り、車で来院する患者さんの車はいつでも駐車することができる。診察室が２つ、栄養相談室兼身体計測室、隔離室兼脳波室、処置室（負荷試験・点滴用ベット５台、処置用ベット２台)、レントゲン室、心理検査室などからなる（図１）。職員は医師２名、看護婦３名、受け付け・事務３名の他、非常勤で栄養士１名、臨床心理士１名、脳波技師１名である。診療時間は午前９時から１２時半、午後２時から６時である。ただし、土曜日は午後４時までの診療である。休診日は日曜、祭日と水曜日である。時間外の患者さんからの緊急連絡には携帯電話で対応している。医療・検査器具類を表１に示す。出来るだけその日の検査結果を見てから診療出来るように、可能な限りのモニター類は揃えてある。生化学、ホルモン検査などは BML に外注している。on line で Host Computer と接続してあり、翌朝にはホルモンなどの特殊検査データーを除き,送信されている（マイケルくんⅡ)。検査データーの時系列 print out も可能であり、紹介状を書くときなどは大変便利である。CT,MRI は幸い至近距離にある病院に設置されており、そこに依頼している。処置室にはプロジェクター式のモニターを設置し、負荷試験や点滴中はビデオやレーザーディスクでディズニーのアニメやミュージカルを映写しており、患児の処置中の退屈さを紛らわすのに役立っている。栄養相談室にもビデオがあり、インスリンの注射法、自己血糖測定器の使用法説明ビデオや教育ビデオの供覧に使用している。インスリンは院内で処方し、

その他の経口、外用薬などは院外処方である。待ち時間を出来るだけ短くするために急性疾患以外は予約制にしている。

糖尿病の患者さんは来院後まず身体計測を行い次に採尿し、それから血糖,HbA１c の測定をし、結果がそろったところで診察となる。診察室には無散瞳眼底カメラ、超音波診断装置、ニュロメーターが置いてあり、定期的に眼底や頚動脈肥厚、神経伝導度の検査を行っている。外来のみの診療であることより、休診日や夜間の低血糖発作が問題となるが、グルカゴンの自己注射を初め対処法を十分に指導することにより対応している。ほとんどの糖尿病児は発症時の初期治療は最寄りの病院でなされており、まれにはその病院にお世話になっていることもあるようである。栄養相談室には糖尿病教育ソフトの「えらんでクリック」や自己血糖測定器 Precision やデキスター Z 解析用のコンピューターも置いてあり、患者さんとコンピュータ画面を見ながらの指導や血糖のコントロール状況について会話ができ、患者教育に役立っている。また、多くのボランティアの方々の協力のもとに、春のハイキング、夏のキャンプ（２泊３日、自炊）、秋の芋煮会、講演会などの友の会活動活動も行っている。合併症を起こさない糖尿病管理を目指し、そのための動機づけに主眼をおいている。

［研究結果］

当院の IDDM の管理状況の一端を示すものとして当院開設後の３年間の HbA1c の月ごとの経過を図に示す。ここに示す症例のほとんどは東北大学小児科外来あるいは出張先の病院で、筆者が診ていた患児である。また表は2月1ヶ月間のIDDM患児の受診曜日を示したものである。土曜日が 13 名と一番多い。

表. 平成11年2月のIDDM患者の来院曜日

曜日	月	火	木	金	土
人数	4	8	4	4	13